

曹洞宗は寺院数でいえば近世初頭に1万6千ヶ寺を超えるまでに大きく発展しているが、この飛躍的な伸張が、いわゆる道元の宗旨・思想を基軸とした曹洞宗の教理と実践に裏付けられて展開したということではできない。曹洞宗におけるこうした寺院数の大幅な増加現象はおそらく一向一揆や石山合戦のような結束を生み出した本願寺教団のような形態とは異なる実態であったのであり、あくまで各門派の僧たちの活動が地域の領主たちや村落共同体の菩提所として地域と結びつきながら、門派としての勢力拡大・伸張であった。こうした問題については教団史もしくは歴史からの視点からの優れた研究成果が作されてきたものの、宗旨もしくは思想史的な解明は以前残された課題である。

というのも、こうした教団拡大期に成立した文献群は、いわゆる洞門抄物といわれ、当時の曹洞宗における公案禪から生み出されたものであった。その中には道元撰述とされる門参・切紙も存在するが、それらは基本的に道元に仮託されて作成された偽書である。また15世紀から17世紀にかけて盛んに撰述された洞門僧の語録は代語という文献は、叢林における正式な年分行事において公案・話頭と提示して、大衆の代わりに模範的著語を示したものを収録したいわゆる中世的語録であるが、そこにはおびただしい公案が提示され、『正法眼蔵』の影を見ることはほとんどない。すなわち中世曹洞宗の教学的課題となるのはこれらの中世曹洞宗文献における道元不在の事実である。むろん洞門抄物に関してはまだまだ資料を開拓していく余地も残されてはいるが、こうした曹洞宗の宗旨における位置づけについて改めて検討すべきであろう。

こうした中世曹洞宗への転換期において重要な位置にあるのが、徹通義介と大智であるが、義介の『劫外録大乘開山徹通和尚之註』や大智の『天童小参抄』・『真歇拈古抄』・『古今全抄』・『無尽集』にみる公案解釈である。特に大智はその偈頌に「賀正法眼蔵到来」を残しているように『正法眼蔵』を閲覧しているものの、『天童小参抄』等の抄物を見る限り、「辨道話」や「現成公案」で強調されている宗旨が直接的に反映されているとはいえない。しかし義介や大智は道元によって導入された曹洞禪をさらに充実させようとして入宋・入元し、同時代の中国禅林へ投じ、叢林の行事や門弟育成方法等様々なことながらについて学んだのであり、あくまで永平下の曹洞禪の充実補強という意識をもった活動であった。その後十五世紀以降には特に関東の了庵慧明下では盛んに公案禪が盛んとなり、その公案解釈の秘訣が伝授された門参なる文献が成立し、明峰派や寒巖派へと派を超えて影響を及ぼしていくようになる。

こうした中世曹洞宗における問題について発表者は菩提寺建立運動・葬祭儀礼・十三仏信仰など、当時の日本仏教の全体状況から改めて捉え直す必要があるのではないかと考えており、こうした道元の宗旨に外縁にある部分を切紙等取り入れた資料などを参照しながら論じていくつもりである。